

報告..百済遺民とディアスポラ

ソウル大学校歴史学部講師
朴芝賢（パク・ジヒョン）



「遺民」は滅びた国の百姓を指し示す言葉である。百済は六六〇年に唐と新羅の連合軍によって滅亡し、多くの遺民が唐や日本へ移住することとなった。

唐に移住した百済遺民は、彼らが残した墓誌を通して定着過程をある程度追跡できる。唐の支配身分に編入された百済遺民たちは各自異なる方法で地位を向上させた。王族の身分を活かし高位官人となった扶余隆、唐の百済征伐で功績を挙げた祿寔進のほか、黒齒常之や祿軍らも軍事や外交で活躍し、その記録は官選史書に残されている。また、百済人同士の婚姻によって勢力を強化したが、次第に唐人との婚姻が増え、百済遺民は唐社会に同化していった。

一方で、日本に移住した百済遺民は、百済滅亡後、故国の文化や技術を持ち込み、日本社会に適応する過程を辿った。日本の新しい支配者層に重宝され、軍事や技術の知識を提供することで高位の官職に就く者も現れた。しかし、百済の滅亡から時が経つにつれ、彼らが持ち込んだ技術や知識は次第に日本人のものと同様になり、単に「百済出身」というだけでは社会的地位

を維持するのが難しくなった。このような状況に適應した遺民もいた一方、淘汰された事例も存在する。

唐・日本に移住した百済遺民をディアスポラとして考察する際、慎重な分析が求められる。百済滅亡後、唐と日本に定着した百済遺民のディアスポラ形成について検討した結果、唐では明確な形態を持つディアスポラは形成されなかった。唐社会において、百済遺民は唐社会との強い上下関係の下に同化を余儀なくされたためである。一方、日本では百済遺民がディアスポラを形成する条件がより整っていた。定着地である日本社会との関係は強い上下関係ではなく、すでに渡来人の定着を経験していたことから心理的距離が少なかった。また、倭王権は知識や技術の利益を背景に遺民を集団居住させたため、百済遺民たちは集団的同一性を維持することが可能だった。八世紀中・後半以降には次第に日本人として変容していったものの、日本では百済人ディアスポラが一時的に形成された可能性が高いと考えられる。

プロフィール

●百済史を専門とする研究者。忠南歴史文化研究所主任研究員を経て、現職。二〇二四年ソウル大学校に博士号を取得。研究テーマは「百済遺民の海外移住と中国出土の百済遺民墓誌の分析」「高麗期百済の対中関係と文化交流・道教・仏教を中心に」「木簡と文字」二四、ソウル二〇二〇）などがある。